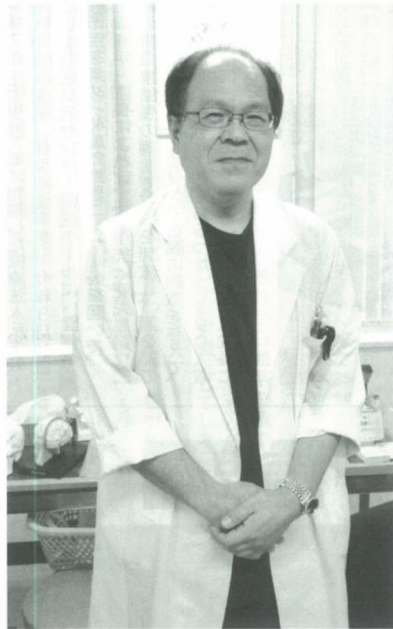


鹿児島 外科的に治るてんかんには早期対応を

鹿児島大学病院てんかんセンター
鹿児島大学医学部・歯学部附属病院

花谷亮典

センター長
脳神経外科 診療准教授



鹿児島大学病院てんかんセンターの花谷亮典先生。先生は、てんかんの発作が頻りに命にかかわることはありませぬ。治療を始めるときは、確かな根拠を持つて始めることが大切です。いろいろな地域に講演に出向く機会も増えました。こんな症状もてんかんだったのか、こんなことに気を付けないといけないのか、など、病院の先生方にも

てんかんの発作は、日本に約100万人の患者さんが存在する、発生頻度の高い疾患です。一方、症状や年齢層が多様で精神症状を合併することもあるため、担当する診療科は小児科・神経内科・神経精神科・脳神経外科と多岐にわたります。当てんかんセンターは、これらの診療科と薬理部・看護部・検査部・ソーシャルワーカーなどが協力して、2013年3月に設立しました。

センターができたことで、てんかんの患者さんを受け入れる窓口が一本化されました。各科との連携も取りやすくなり、スムーズな診療が行えるようになりました。

てんかんの発作は、成人になっても、小児科医が、成人になつた患者を担当し続けていることです。中には、担当している患者の約半分が成人という小児科のてんかん専門医もいます。成人になると、てんかん以外の病気を発症する可能性がります。そうなったとき、小児科医だ

知っていたら、紹介件数が増えました。現在、年間紹介件数は百数十件で、毎年増えていきます。鹿児島県の規模からすれば、まずまずの数字だと思います。

また、地域には、「周囲に知られると暮らしづらくなるから、地元病院にはかかりたくない」という方がまだたくさんいます。しかし、てんかんは脳の病気であり、差別や偏見の対象となるものではないのです。ですから、近所で診てもらえるならそれが一番いいというところを、もっと普及していきたいですね。

全国的に問題になってきているのは、小児科医が、成人になつた患者を担当し続けていることです。中には、担当している患者の約半分が成人という小児科のてんかん専門医もいます。成人になると、てんかん以外の病気を発症する可能性がります。そうなったとき、小児科医だ

けでは対応ができません。それ以上に、小児のスペシャリストが成人を診ている状況は、人的資源の使い方として非常にもったいないですね。もったいない日常生活を送ることができるといっても、時々発作があったとしても比較的簡単に成人科へ移行できます。しかし、発達障害を伴っている方の成人科への移行はなかなか難しく、さらに内臓を含め、他にも病気を抱えている方をまとめ、引き受けられる成人科は今このところないのです。

例えば、結節性硬化症という病気があります。皮膚、頭の中、内臓などにできる硬い腫瘍のようなもので、頭の中にできると、それが原因でてんかんを起します。小児で発症することが多く、発達障害を伴うことも多いため、このような患者は診療中もじっとしていることができません。薬で鎮静しないと検査ができません。このまじりばいばいで、重度の発達障害を専門とする診療科もありま

せん。また、疾患が複数の臓器にわたつていても、子どものうちは、子どもの総合医として小児科医が何とか対応してくれますが、大人になると、診療は基本的に臓器・疾患別に分かれてきます。紹介を受けた医師だけで複数の臓器にわたるマネジメントを行うことは大変困難です。

「てんかん」は、日本に約100万人の患者さんが存在する、発生頻度の高い疾患です。一方、症状や年齢層が多様で精神症状を合併することもあるため、担当する診療科は小児科・神経内科・神経精神科・脳神経外科と多岐にわたります。当てんかんセンターは、これらの診療科と薬理部・看護部・検査部・ソーシャルワーカーなどが協力して、2013年3月に設立しました。

センターができたことで、てんかんの患者さんを受け入れる窓口が一本化されました。各科との連携も取りやすくなり、スムーズな診療が行えるようになりました。

てんかんの発作は、成人になっても、小児科医が、成人になつた患者を担当し続けていることです。中には、担当している患者の約半分が成人という小児科のてんかん専門医もいます。成人になると、てんかん以外の病気を発症する可能性がります。そうなったとき、小児科医だ

けでは対応ができません。それ以上に、小児のスペシャリストが成人を診ている状況は、人的資源の使い方として非常にもったいないですね。もったいない日常生活を送ることができるといっても、時々発作があったとしても比較的簡単に成人科へ移行できます。しかし、発達障害を伴っている方の成人科への移行はなかなか難しく、さらに内臓を含め、他にも病気を抱えている方をまとめ、引き受けられる成人科は今このところないのです。

例えば、結節性硬化症という病気があります。皮膚、頭の中、内臓などにできる硬い腫瘍のようなもので、頭の中にできると、それが原因でてんかんを起します。小児で発症することが多く、発達障害を伴うことも多いため、このような患者は診療中もじっとしていることができません。薬で鎮静しないと検査ができません。このまじりばいばいで、重度の発達障害を専門とする診療科もありま

せん。また、疾患が複数の臓器にわたつていても、子どものうちは、子どもの総合医として小児科医が何とか対応してくれますが、大人になると、診療は基本的に臓器・疾患別に分かれてきます。紹介を受けた医師だけで複数の臓器にわたるマネジメントを行うことは大変困難です。

乳幼児期に発症したてんかん発作が止まらない頻回にくりかえすと、精神発達に遅れが出てくることもあります。この点からも、できるだけ早期に対応することが必要です。薬で治らなくても、外科的治療によって改善する場合があります。

最近では、外科治療の認知度が高まっていて、小児科医の間でも注目されています。幸い、当センターには外科的治療に詳しい小児科医がいます。生後3カ月くらいからの乳児でも外科治療ができることと判断すれば手術することがあります。すべてに

てんかんの外科治療

てんかんの外科治療

てんかんの外科治療

てんかんの外科治療

http://www.kufm.kagoshima-u.ac.jp/~ns/epilepsy/